



『編集さんと 作家さん』

宇喜多広生

「ええアイデアを思いついたんや！」

『編集さんと作家さん』

第1話 「ええアイデアを思いついたんや！」

PPPPP！（電話）

編：「もしもし？」

作：「ああ、おれおれ」

編：「……………」

作：「ごめんなさい！嘘です！俺です！だから切らんで！」

編：「なんなんですか？　そもそも携帯で呼び出し画面出てるんですからわかってますけど」

作：「ほななんで切ろうとするねん！」

編：「……ちっ」（うざいからです）

作：「なんやねん、そのうざそうな『ちっ』はあっ！？」

編：「で？　一体なんの用なんですか？　こう見えても僕忙しいんですけど」

作：「すごい棒読みですね……いやいや、こないだから言ってた敵役にええキャラ思いついてん！」

編：「へえ」

作：「どう？　なかなかええタイミングなんちゃうん？」

編：「タイミングどうこうで言うのとっくに遅いんですけど……まあ聞きましょう」

作：「なんでそんな上からやねん？　まあええわ。あんな洗面器ってあるやん？」

編：「まあ、ありますよね」

作：「それがやな、『千面鬼』やねん」

編：「……………」

作：「あれ？　なんかリアクション薄ない？」

編：「いや、フツーに想像してただけです。で、それってどんなんなんですか？」

作：「それがな千の顔を持つ化け物やねん」

編：「そのままですね」

作：「そのままやねん」

編：「で？」

作：「で？」

編：「で？」（苛）

作：「で？」（焦）

編：「でっ？」（怒）

作：「『で？』だけ言われても何言われてるかわからへんやん！なに怒ってんねんな？！」

編：「なにもへったくれもありませんやん！なんやねんな！フツーに結局その洗顔器やら洗面器やらの何が怖いのか聞きとるだけやないですか！」

作：「ほんならそう聞いたらええやんか！ てか今のん端で聞いたらなんかまるで会話通じとるみたいでめっさ仲良いみたいで気持ち悪いわ！」

編：「ほんで？」

作：「……おい、待て。その『ほんで』は『千面鬼』の続きについて問いかけてる『ほんで』でええんやな？」

編：「わかるんじゃないですか」

作：「いや、なんで俺試されとんねん？」

編：「試してませんよ。結果は分かってますから」

作：「なんかむかつくな……まあええわ。いやな、あのな、銭湯にな、黄色いプラチックの洗面器あるやん？」

編：「あるんですか？」

作：「あるよ……てか知らんの？ほら、ケロタンやかケロピョンとか描いてある黄色い洗面器やん？」

編：「知らないです。僕、銭湯とか行ったことないんで」

作：「マジで？」

編：「マジで」

作：「へええええええ……」

編：「なんなんですか？銭湯行ったことないんがそんなに珍しいんですか？」

作：「うん、ちょっと珍しい」

編：「で？ そのケロヨンって描いてある黄色い洗面器がどうしたんですか？」

作：「ちゃんと知っとるやんけ！」

編：「で、その洗面器がなんで『千面鬼』になるんです？」

作：「いやあ。実はな、そのアイデアだけで他なんにも考えてへんねん」

ピッ！（電話切る）

翌日、千面鬼についてのとりとめのない、くだらない、使えない、やるせない、どうしようもない設定がメールに届いていた。